

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

論題(和文)	上級段階の作文指導
Title(English)	A Teaching Method of Composition for Advanced Japanese Course
著者(和文)	仁科喜久子
Authors(English)	KIKUKO NISHINA
出典(和文)	講座日本語教育第 2 1 分冊(早稲田大学), Vol. 21, No. , pp. 105-123
Citation(English)	Koza Nihongo (University of Waseda), Vol. 21, No. , pp. 105-123
発行日 / Pub. date	1985,

上級段階の作文指導

# 上級段階の作文指導

仁科喜久子

仁科喜久子

コトシ

文部科学省の調査によると、1983年度の調査結果から、  
上級段階の作文指導の重要性が認識され、  
そのための教材の開発が急務とされている。  
本書は、そのための教材として、  
1983年度の調査結果を基に、  
上級段階の作文指導の重要性を説き、  
そのための教材の開発を促す。  
本書は、上級段階の作文指導の重要性を説き、  
そのための教材の開発を促す。  
本書は、上級段階の作文指導の重要性を説き、  
そのための教材の開発を促す。  
本書は、上級段階の作文指導の重要性を説き、  
そのための教材の開発を促す。

上級段階の作文指導

本書は、上級段階の作文指導の重要性を説き、  
そのための教材の開発を促す。  
本書は、上級段階の作文指導の重要性を説き、  
そのための教材の開発を促す。  
本書は、上級段階の作文指導の重要性を説き、  
そのための教材の開発を促す。

講座 日本語教育

第 21 分冊

早稲田大学語学教育研究所

# 上級段階の作文指導

仁科喜久子

## はじめに

本稿は、早稲田大学語学教育研究所および東京工業大学で留学生に作文を指導した経験から上級段階の作文指導の実際的な方法を述べ、問題点を明らかにし、今後の課題を考えようとするものである。

まず、実例として対象にした3クラスの説明をしておく。

(1) 1983年度に行なった早稲田大学学部一年生「表現」のクラス。このクラスは週一回90分の独立した授業である。速読、精読、聴解などと平行してあり、学生は3~4クラスを受講する。

(2) 東京工業大学(以下「東工大」とする)学部二年のクラス。日本語授業は週一回90分のみで、この中で読解、聴解、口頭表現を含めたあらゆることを扱わなければならない。主として1983年度のものを対象とした。

(3) 東工大大学院研究生のクラス。クラス時間は(2)とほぼ同じ状況である。資料としてここ数年のものを対象とした。

## 1. 「上級」の定義

「上級」といわれるクラスは、それぞれの学習の到達目標に最も近い能力をもつ集団といえよう。しかし、その到達目標は、各機関によって差がある。ここでは、日本の大学で学んでいく留学生に必要な能力について述べる。

そこで必要な言語行動として、次のようなことが考えられる。

- (1) 講義に出席してその内容が理解でき、ノートを取ることができる。
- (2) 試験の答案が書ける。
- (3) 課題レポートが書ける。
- (4) セミナーなどで、他の発表者の話しが理解でき、それに対する質問や意見が述べられる。
- (5) 研究テーマを調査し、実験し、それを整理して発表できる。
- (6) 卒業論文あるいは学位論文などの研究論文を書き、それらを口頭発表し、質問に答えることができる。

これらのことが日本語で支障なくできれば、日本語学習の目標は達成できたと言えよう。

しかし、限られた留学期間に、それぞれの日本語能力を十分に満たした上で、専門の勉強に入るというのは、現実には殆ど不可能である。木村宗男先生の言を借りると、「上級終了後も専門の仕事と平行して、日本語の勉強を続けなければならない。そのような自学自習の素地を作ることが上級の目標と言ってよいだろう。一般日本人並の日本語の言語生活を音声、文字両面にわたって行うことができ専門の勉強、仕事に必要な最少限度の術語の専門知識をもっていること、その上、なによりも大切なことは辞書を使ってみずから学ぶことができるということである。」(「日本語教育」22号)とある。上級の目標を「自学自習を行う素地作り」とするのは現実的で妥当な考え方であろう。

このような考え方に基づいて、上級の作文学習はどうあるべきかということを考えることにする。

## 2. 四技能と「作文」との関連

### 2-1 四技能について

一般に日本語能力というと、読む・聞く・話す・書くの四技能が問題にされる。この四技能は初級、中級と段階を追って養成され上級でもさらに

各々の技能の向上を目指して、カリキュラムが考えられるものである。理想を言えば、初級がバランス良く伸ばされるべきなのであるが、現実には上級クラスの学生は、さまざまな学習背景を持つ学生が集まっていることが多く、そのバランスの均等を望むのが難しい。

## 2-2 四技能と「作文」

「作文」という語の源は、欧米での composition 教育に遡る。そこでは、読む・聞く・話す・書く・考えるという総合的言語習慣の習得を目的としている。(composition の歴史について参考文献 12 に詳しく述べられている。)

日本語教育で作文を考える場合にも、このような総合的効果を配慮した方法がなされるべきであろう。本稿では、文字表現としての作文に主眼をおいて述べるが、口頭表現との関連も留意しておきたい。

次に、実際の学生の言語行動を考えながら、上級作文学習として習得すべき事を検討する。

## 3. 上級段階の作文学習の目的

### 3-1 学生の言語行動

大学で学ぶ学生の言語行動は 1 章で述べた上級の達成目標 (1)~(6) と重なる。ここでは文字表現を含むものとして、(a) 講義ノート (b) 課題文の要約 (c) 課題作文 (d) 自由作文 に分けて簡単に説明する。

#### (a) 講義ノート

講義を受ける時、教師の話聞き、教科書・黒板の文字を読解しながら要点をつかんで簡潔に表現する能力が要求される。

講義ノートは自分に分るように書けばよいが、(b) 以下は、特定あるいは不特定の読み手を想定し、その相手に分るように書かなければならない。

#### (b) 課題文の要約

大学では課題として参考文献を読んで、要約を書かされることがある。

その場合、限られた時間に多量の文章を、いかに読みこなすかが問題になる。他者によって表現された文章を、正確に客観的に内容を把握して、すみやかに簡潔な文章にまとめる能力が必要である。

### (c) 課題作文

筆記試験では、当を得た解答が書けなければならない。また、与えられた課題について、かなりの量のレポートを書く必要がある。さらに、卒業論文、雑誌論文なども書かなければならない。広い意味で、これらを課題作文と考えることができる。自分の思考内容を論理的に組み立て、読み手を説得する能力が必要になってくる。

### (d) 自由作文

国語教育で「自由作文」というと、思いつくことを自由に、文章にするものを指す。しかし、ここでは上の課題作文に対し別の意味で用いる。大学の課程で課されるもの以外の文章で、しばしば書く必要に迫られるものがある。手紙はその中の一つである。場合によっては、新聞・雑誌の文章を依頼されることもある。結婚披露宴やその他のパーティでのスピーチの原稿を作ることもあるだろう。これらは直接大学での勉学と関わりないが、私的な生活では切実で学習動機は大きく、作文練習の効果は大きい。

## 3-2 作文学習者の背景

次に作文指導に当たって学生の(1)母語(2)学習経験(3)専攻について考えておかなければならない。

### 3-2-1 母語について

母語によって漢字系、非漢字系学生に大きく分ける。中国語圏の学生は、中国語と日本語の文法体系が大きく異なることに注意しなければならない。漢字系の学生は漢字を拾い読みすることで、文章構造が正確に掴めていなくても、日本語の文意がなんとなく分ったような気になることがある。それがかえって禍いとなり、できあがった文章は、教師がどこから手を付けてよいか分らないという事態も起こる。また、中国人の場合には簡体字を用いると日本人には通じないこともあるので、気をつけなければな

らない。

一般に漢字系学生が注意すべきことは、同じ漢字の熟語でも意味用法が違う点である。しかし、専門分野の文章を書く場合、母語と共通する漢語の用語が多いので、非漢字系学生と比べると断然有利である。これに専門分野での頻出度の高い文型が与えられれば、要求水準をかなり満たす文章が書ける。

それに対して非漢字系の学生には、母語と共有できる漢語の語彙が、出発点から皆無である。しかし、限られた分野での必要十分な語彙・文型の学習の指示があれば、ある程度の目標に達することは可能である。

### 3-2-2 専門別の問題

大学で日本語を学習する学生は人文科学、社会科学、自然科学などの各々の専門分野に属している。それらの各分野によって書く能力の到達目標は異なる。特に日本語そのものを専攻する学生や、日本学を志す学生の場合には、文化的・社会的背景から来る日本語独特の表現が要求される。一方、理工系の文章では、それを排除して考えられる場合が多い。3-2-1で述べたような一定の語彙・文型の提示によって、必要十分な文章が書ければ、効率の高い学習をしたことになる。各専門分野と協力して、日本語科学論文の作成マニュアルのようなものを作ることは、今後考慮しなければならない。

以上、作文学習者の背景に関連して、配慮すべきことを述べた。次にこの学習者に対して、教室ではどのように対処するかについて述べる。

## 4. 作文授業の実際

### 4-1 書く前の注意事項

学生がペンを取って書く前に、教師は事前に学生の誤りを防ぐことを考えなければいけない。でき上がった作品がその到達目標に遠いものであれば、指導の効率が悪かったということになる。

学生の中には、原稿用紙をはじめて見る者もいる。原稿用紙の上下左右

の区別，ます目のあけ方，改行のし方を説明しておくことも大切である。これを怠ると，後で添削に時間がかかり，教師が無駄な労力を費やす結果になる。筆者の場合，教室で注意事項を説明した上で，各自に「国語表現ハンドブック」(参考文献 14)を持たせている。

#### 4-2 教科書・参考書について

独立した「表現」のクラスで用いる教科書として，現在のところ外国人学生用に作られたものは，管見に入っていない。筆者は前学期には，高校生用の作文練習帳(参考文献 16-17)などを用いたり，学生の誤用例から抽出した表記，文法，用語に関する問題のハンドアウトを配布し，教室内で練習したりした。後学期には，「文章構成法」(参考文献 15)を中心とし，説明文・意見文・レポート・手紙文などについて概説しながら，それぞれの文章を書かせた。

上級の文章表現の練習として，日本人高校生・大学生向けの教科書がある程度利用できるが，それだけでは十分ではない。

外国人の場合，短い文の単位からそれが有機的に集まった段落となり，その段落の有機的な結合体としての文章に至るような練習法がことに必要である。教師はこの点に留意して，教材を用意しなければならない。

#### 4-3 課題文の与え方

学生の言語行動として，講義ノート・レポート・論文・手紙などを書くことを 3・1 で述べた。留学生がこれらのものを不自由なく書ければ，書く能力は十分と言えよう。ここではその能力を養成する教室での方法を述べる。

講義ノートの取り方については，「日本語教授法」(参考文献 10)で実際の教室作業が詳細に述べられているので，参照されたい。

##### 4-3-1 文章の要約

要約を書く練習をするには，そのもとになる文章がまず必要である。教室では教師がそれを提示し，その要約文の長さを指示することになる。どのような文章を提示するかは，様々な工夫があろう。その一つとして速読

用教科書を利用することは、効果的である。

既に読んだページの要旨を述べさせることで、学生の読解の正確さを診ることができる。また、その授業時間に読み終わった所から後のページを要約する宿題を課し、次の時間はその先を読むようにすると、学期内の限られた時間で比較的多量の文章を読むことができる。ある時は、授業時間内に一定のページ数を黙読させ、要約をその場で書かせる。こうして読む、書くの組み合わせで一冊のテキストを終えるまでに、学生は相当の量がかかり速く読めたと言う満足感と自信を持つ。

その他の方法として、VTR・新聞・雑誌記事などから選んだ教材を教師が用意し、その要約を書かせ、その後教室で発表させたり、それについて討論することもできる。上級と言っても現実には様々な形態があるはずで、それらをどのような時間配分で行なうかは、それぞれの事情で決めて行かなければならない。

どのような方法を用いても、要約を書くことの効果は、他者によって書かれた文章を正確に客観的に把握し、それを自分の中で咀嚼しながら再構成し、表現能力をつけることにある。さらに読み手に対する配慮として、表記法・句読法の規則を守る習慣をつけさせる。

本文のある個所をそのまま引用して、繋ぎあわせる学生も中にはいるので、前もって注意しなければならない。しかし、その文章のキー・ワードを掴み、言い回しを巧みに取り入れた文章はむしろ奨励してもよいと思う。模倣は自らの表現法を新しく獲得する方法であり、良い手本を模倣することで、良い創造につながることも考えられるからである。

#### 4-3-2 説明文

日常生活でのとりとめのない世間話などでは、自分の知っている語彙・文型だけ用いて話すこともできる。しかし「～について説明せよ。」と求められると、必要な情報を正確に相手に伝えることは難しい。

作文の授業では比較的易しい道順の説明から、機械や器具の使用法、料理法や工作の手順などの複雑な説明などまで練習できる。母語では簡単な

ことでも、日本語でその行為や過程を追体験しながら、表現するのはもどかしいはずである。しかし、それによって、言語とその指し示す実体との対応が感覚的に身につくという効果もあり、必要な情報を正確に表現する訓練ができる。

#### 4-3-3 意見文

読解用教材を要約の練習に利用することを先に述べたが、意見文の練習にも使える。実例文として付録に挙げた作品は、東工大学部二年生の授業で読んだ文章の一節から発展してできたものである。教材は広中平祐著「生きることと学ぶこと」である。その中で著者の両親について触れているところから、学生達自身の両親観を話し合っ、それをもとに各自の考えをまとめて文章に書かせたものである。

独立した「表現」のクラスの場合は、4-3-1 要約で述べたような方法で、VTR・新聞・雑誌の記事・単行本の一部などを与える。題材の内容が、学生にとって興味深いものだと、懸命に意見を述べる。VTR などでは聞き取れないことがあるので、キー・ワードやむずかしい慣用句などを挙げたハンドアウトを渡す方が効果的な場合もある。

「表現」のクラスでは、学生が話しやすい状況を教師が準備すると、その時間が有効に使える。そうしておいて、教師は学生の内容理解を確認しながら、学生達の意見を引き出すように質問を重ね、討論に導き、その意見を文章に書かせるというのは前述の方法と同じである。このとき、さらに深く追求して考えるためには、正確な資料が必要となることもある。そこで、事典・雑誌・新聞などの参考資料を調べるように示唆したり、自分で探すように指示することもある。これは学生にとっては、自学自習の予備訓練になるはずである。テーマが興味深いものであれば、自発的に調べてくる学生もでてくる。教師が常に新しい教材を探す心掛けを持つことが、この方法における成功の鍵となる。

さらに上級クラスでは、学生に自主性を持たせる方法として、自分でテーマを決めて、教室で発表するという試みもできる。このとき発表をする

学生にはレジメを作って配布させる。

## 5. 添削の方法

学生の提出した作文は教師が添削し、次の授業でそれぞれの学生のもとに返すのが一般に行なわれている。しかし、たまには提出された作文の中から、1~2作品を選んで授業の中で添削をすることもできる。選んだものをコピーしておいて、授業では学生全員にそれを渡し、作文を書いた当事者に音読させる。そこで他の学生に印象を述べさせ、分らない個所があれば当事者に質問をするように指示する。それについて当事者が答えたり、他の学生がもっと適切な表現について意見を述べたりする。教師は場合に応じて助言をする。このようにして添削された作文を、当事者は翌週までに書きなおして来るのである。教師は再びそれをチェックする。(付録の作文は以上のような過程で出来たものである。)欠点はひとつの作文に時間が掛かり過ぎることである。1回の授業で2作品ぐらいしか扱えない。しかし、それにもかかわらず、他の学生の作文を通して、それぞれの学生が言葉を探し、文型を整え、文章全体の構成を考えることに参加できるという利点も大きい。この時教師は、個々の学生の特殊な問題と、どの学生にも共通する問題とを見極めておかなければならない。そして、教室で扱えないものは個人的に口頭で指導することが必要になる。

## 6. 評価法

つぎに成績評価について述べる。評価の方法として筆者が行なっているのは、(イ)表記法(ロ)句読法(ハ)文法(ニ)用語法(ホ)構成法(ヘ)内容の各々に評価点を割り振って、さらに総合点をつけるものである。作文の評価は客観的で、学生の今後の作文学習に参考になるものが望ましいと思う。しかし、客観的と言っても自然科学のようにはいかないので、評価点を、計量的に出すことだけは十分ではない。学生の励みになるような評価の配慮も大切である。

## 7. 誤用の分析とその対策

以上のように書かれた作文の実例を見ることにする。まず実際の学生の誤用例で目立つものを取り上げ、その理由と対策を考える。分析の対象にした作文は、平均800字程度の文章145作品である。このうち非漢字系学生のもものが35作品で、あとの110作品は中国、台湾、韓国の漢字系学生のものである。

以下(イ)表記法(ロ)句読法(ハ)文法(ニ)用語法(ホ)構成法(ヘ)内容にわけて見ていく。

### (イ) 表記法

表記法の問題としては、ひらがな、カタカナのかなづかい・漢字・数字の書き表わし方がある。学生の作文で目立つ誤りとしては、次のものがある。

- |                |            |
|----------------|------------|
| (1) 清濁の音の表記    | (6) 同音漢字   |
| (2) 音節の長さの表記   | (7) 漢字の形態  |
| (3) 促音表記       | (8) 簡体字の使用 |
| (4) 外来語のカタカナ表記 | (9) 繰り返し記号 |
| (5) 送りがな       |            |

各々の例を次に表で示すが、(1)から(3)の誤りは、それまでの学習の発音の認識が不正確であったことを示している。文章に書いてみてはっきり分ることであり、発音矯正の良い材料にもなる。教師は作文の原稿用紙に朱筆を入れるだけでなく、誤った発音の語を口頭でチェックする機会を作るべきである。

(4)のカタカナ表記の誤りはかなり多い。日本語学習者にとって、カタカナ外来語は日本語学習以前に母語としてあるいは外国語として既に知っている語であることが多い。それを日本語の音声体系に入れて認識することは他の和語・漢語に比べてかえって難しいものとなるのである。規範に従わせることにあまり神経質にならなくてもよいと思う。しかし、読み手が理解に苦しむような表記は避けるように注意しなければならない。

(5)~(7) のかなづかい・漢字の誤りは一般の日本人もしばしば犯すものである。書くときには国語辞典・表記法のハンドブックなどを手元に置く習慣をつけさせるべきである。

〈誤用例〉

- ex 1 イ-1 いそかしくしている時……(韓, W 32)
- ex 2 イ-1 精神をすこしても休める……(韓, TR)
- ex 3 イ-1 たいだい夜の八時ごろ返る。(台, TR)
- ex 4 イ-1 兄弟けんがなんかしたり……(台, W 21)
- ex 5 イ-2 現在にしろう, 将来にしろう, 歳月を経てもなお……(中, W 21)
- ex 6 イ-2 かのぞ(じょ)がデザインしたアックセサリを……(韓, W 29)
- ex 7 イ-3 人工衛生を打上げて……(台, TR 24)
- ex 8 イ-3 よく知ていなかった。(台, WII)
- ex 9 イ-4 パスーポト(パスポート) <( )内は筆者の判断による訂正>(台, W 33) ウィスケ(ウイスキー)(インドネシア, TR 5) ローボット(数例)コンミュニケション(台, TR 28) ドラプル(トラプル)(台, TR 24) ビルー(ビール)(中, TR 中 5) アディソン(エジソン)(タイ, TII 12)
- ex 10 イ-5 寮に帰えった。(中, TR)
- ex 11 イ-5 ロビンからあまり習ない。(豪, TR)
- ex 12 イ-6 成長課程において, 先生の及ぼす影響は……(韓, TR)
- ex 13 イ-6 味知の世界(韓, TR)
- ex 14 イ-7 末来の韓国 大休(体)同じ水準 人間は抱(拘)束されるのをきらう(韓, TR)
- ex 15 イ-8 样子(様) 风(風) 厂史(歴) 生产(産) 距离(離)(中)
- ex 16 イ-9 あるがま々の人生 一人々の人生……

(但し、韓=韓国，台=台湾，豪=オーストラリア，中=中国，T=東工大，R=研究生，II=2年生，W=早稲田大学，数字=学生の番号)

#### (ロ) 句読法

句読法は文章を書くのに必要な記号を扱うものであり，表記法の一部として扱うこともできるが，ここでは別個に取り出した。

(1) 「。、・，？」などの文の切目を表す記号

(2) 種々の括弧

に分けて見る。作文を書くまで「。、」と「・，」の区別があるのがわからなかったという学生が意外に多い。日本語で縦書きに書く場合は「。、」を用いるように指導するべきであろう。引用符も「"」をもちいる学生も多い。また鍵括弧を左方から始め右下で閉じる例も多い。これらは書く前に教師が注意しておけば防げるものである。

#### (ハ) 文法

学生に文法の誤りを指摘する場合，なぜそのような誤りが生じたかを分析し，それに基づいた指導が大切である。その分析方法として，文を品詞に分解し，各々の誤りを取り上げて指摘しただけでは効果が少ない。文章を語・句・節・文のそれぞれの単位からなる構成体として考え，全体と部分の有機的な関係で捉えて説明するほうが学生には理解し易い。

語のレベルの誤りとして，次の3つがある。

(1) 用言活用 (ex 17)

(2) 名詞句 (ex 18)

(3) 副詞句 (ex 19)

これより大きい単位としての文は単文，複文(重文)に分けて見る。まず単文では[名詞・助詞・述語]の連なりをしっかりと認識することが大切である。単文のレベルでは次のものがある。

(4) 助詞 (ex 20)

(5) 述語の接続 (ex 21)

(6) 受身文 (ex 22・23)

(7) 自動詞文と他動詞文 (ex 24)

(8) 使役文

次に複文構造の文では[句・助詞・述語]の構造が正確に理解できなくては  
はいけない。

(9) [述語句・引用辞「と」・述語]などの文 (ex 25) の接続構造

(10) 時制の一致 (ex 26)

(11) 複雑な重文では、文の内容の論理的整合性も問題になってくる  
(ex 27)。

長文の場合、論理的明晰さと修辭的効果という観点で、文を適当な所で切  
ることも指導しなければならない。上級に進むにつれて学生は長文が書け  
るようになるが、かえって難解なものを書いてしまう危険も生じる。

複文・重文の中の助詞「は」「が」の使い分けは、外国人が最後まで困惑  
するものである。日本語教育の論文でも、これまで度々取り上げられてい  
るが、学生の誤りは依然として多い。

学習者にある程度の構文意識を持たせることが、このような困惑から抜  
け出す手立てになると思う。すべての学生が言語学者になるわけではない  
ので、それに偏りすぎるのは戒めるべきであるが、知的水準の高い学生に  
は有益であろう。

#### 〈誤用例〉

ex 17 ハ-1 ウランはエネルギーとして扱わられる。(タイ, TII 12)

ex 18 ハ-2 自分を試すのは恐るべきのです。(カナダ, W 19)

ex 19 ハ-3 両国は地理(的)に近いために日本からの輸入は安くなり  
……。(台, W 7)

ex 20 ハ-4 日本へ勉強しながらアルバイトをしなければならない生活  
に選びました。(中, W 27)

ex 21 ハ-5 それは大變むずかしいである。(韓, W 12)

ex 22 ハ-6 私は彼といっしょに行動することによって、ある程度の

- 明るさも回復されました。(韓, W 26)
- ex 23 ハ-6 多病の母は自分の給料で私をはぐくまれていくことがどんなにつらいことだったのだろう。(中, W 22)
- ex 24 ハ-7 母は一人で生活を続きながら, 私が一人前の技術を身につけて.....(中, W 22)
- ex 25 ハ-9 私も小学校を卒業したら台中へ行くと思っていました。(中略)両親は私を台中へ転学させてと決心しました。(台, W 30)
- ex 26 ハ-10 サマー・キャンプに行った前別に問題はなかったから(米, W 36)
- ex 27 ハ-11 オキーフの家族は多かったから, はやく独立することになって, 色々な寄宿制学校へ行って, 結局 SL という芸術学校へ行った。(中略)テキサスの広がっている平原と極彩色の風景はオキーフの一番好きな所で, 彼女に強い印象を与えて, それから彼女に大きい影響を与えた。(豪, TR 42)
- ex 28 ハ-12 今のような便利な社会になっているのは技術の発展のおかげであろう。そして, それぞれの技術が成熟するまではいろいろな困難を乗り越えて来たことは想像できるのである。しかし, 人間は困難にぶつかって, それを乗り越えたのはそれぞれが目的が合ったに違い無い。(タイ, TII 12)

## (二) 用語法

用語法では日本語として認められない誤りと, 誤りとは言えないが何となくおかしいものがある。用語の場合, 慣用的なものなどは理屈抜きで学ばなければならないことが多い。文法の規則を覚えるのとは事情が違う。誤りが生じる原因としては, 次のようなことが考えられる。

(1) 母語の干渉 (ex 29, 30)

(2) 辞書の引き写し (ex 31)

(3) 改まった表現とくだけた表現の混同 (ex 32, 33)

(1) の母語干渉の問題は、3-2-1 で母語について述べたことと関連がある。教師は学生がどのような思考過程で誤ったかを推理し、適正な表現の指導をしなければならない。そのためには、それぞれの学生の母語の特徴を知っていることが望ましい。

(2) の辞書の引き写しというのは、自分の表現したい概念を母語から辞書で引いて、日本語に置き換えるときに起こる誤りである。ある場合は滑稽だったり、全く通じなかったりする。この種の誤りを防ぐには、なるべく対訳辞書を使わせないような指導法を工夫しなければならない。それには読解・聴解の授業と相互的な関わりを持たせ、既習の語彙・用語法を作文で応用させる指導法を工夫すべきであろう。

(3) は広い意味での文体の問題であり、待遇表現とも関係がある。各々の場面に対応する適切な表現を選ぶのは、日本人にも難しい。まして外国人には相当経験を積んでも、なかなかできない。しかし、文末の文体を一致させることなど、注意を払えば容易に直せるものもある。

〈誤用例〉

ex 29 ニ-1 日本語の習いの一つの原因はこういう興味から出てきたのだ。(米, W 36)

ex 30 ニ-1 それは私に対して(とって)全く準備していなかったことで……(台, W 30, その他「対して」を「とって」の意で用いた例は中国人の文に多い。)

ex 31 ニ-2 ねり粉(パン生地)がねばりつかないようにわん(ボール)を準備する。(米, W 36) (英和辞典で 'dough' の訳語は「ねり粉, こね粉, パン生地」とあるが、現在「ねり粉」という言葉は殆どきかない。「パン生地」というのが普通だと思う。)(米, W 36)

ex 32 ニ-3 オーストラリアでも B 先生は学生みたい。(中略)だから、

私の先生は先生じゃなくて友人だ。(豪, TR)

ex 33 ニ-4 日本人の生活はお茶と密接な関係があると思う。ですから、日本人が分るために茶道を習わなければならないと思っている。(韓, TR 8)

#### (ホ) 構成法

文がいくつか集まって段落ができ、段落がいくつか集まって文章ができる。この文から文章に至る過程を構成法として考える。段落を構成する方法として、一般に「起・承・転・結」「序論・本論・結論」などの名称が知られている。これを組み立てていくことは、日本人でも外国人でも同じはずである。しかし、やはり外国語で書くとなると、筋が通るように作るのは難しいものである。指導する場合、段落の文字数をほぼ決めておいて、論旨の一貫性が求められるような段落をまず完成させる。次にそれを組立てていくような段階的な練習問題を与えると有効である。(参考文献 20 は英文のためのものであるが学習者に段落の考え方を定着させる方法として参考になる。)

#### (ヘ) 内容

次に文章の内容について述べる。留学生の場合、日本語で芸術的創作を目指すということは殆んど考えられない。Barras (参考文献 22) は大学生の文章として、次の6つの条件を満たしていることが肝要であると述べている。

- (1) 説明の分り易さ
- (2) 意味の明確さ
- (3) 伝達の簡潔さ
- (4) 情報内容に欠落がないこと
- (5) 叙述の正確さ
- (6) 効果的な順序の配列

作文を指導するときにも、これらの事柄は留意すべきであろう。

## 8. 終りに

上級段階における作文指導で、教師が心に留めなければならないことを、最後にまとめとして述べる。作文の授業としては、限られた時間に完成度の高い文章が書けるようになれば、効率の良い望ましい授業と言えよう。そのような授業をするためには、教師は効果的な方策を講じ、誤用を分析し、学生に指摘し学習させることが必要である。それには、綿密な授業計画と作文の誤用例を資料として分析する研究意識をもたなければならない。その事例から帰納的に授業計画を作り、それを演繹的に利用することを繰り返すのである。このような試行錯誤は不可欠である。外国語の作文では、母語の場合以上にコントロールされた教案が必要である。

学生が作文のクラスで学習した結果、明快かつ正確で、説得力のある文章が書けるようになれば、そのとき作文の授業は成功であったと言えよう。さらに、書くことの楽しさを覚えた学生が出てくれば、教師としても喜ばしいことである。

### 〈付録〉

### 「人生の師」

ワット(タイ・TII)

だれだって(=)、生まれつきの天才(=)を持っているわけでもないし、すばらしい物を発見でき(ハ)(=)ても、おそらく、だれかの書いた本を読まなければ、そんなことを簡単に発見できないと思う。普通の人間は身近な人から学びとる状態(=)が多い。生まれてはじめて知っている(ハ)仲間と言ったら、まず親や兄弟である。これらの人間は自分の人生、自分の将来に多かれ少なかれ、影響をおよぼすだろう。

ちなみに、私の親の例を取って話しましょう(=)。父は体が大きい、いや、小さい頃に父を見ても(ハ)そうであったが、最近になって、そう言う感じがだんだんなくなった。父は太っているから余計に大きく見えるかもしれない(ハ)。子供の立場から見ると、父は強くて、力もだれより負けないだ(ハ)と自分(=)は感じていた。そのときの父を見て、やさしいときもあるが、むしろ厳しさを前に出すタイプでした(=)(ハ)。子供、だれでも(ハ)、厳しい父、こわい父よりもやさしい父が好きだろうが、年齢をたつに(=)つれて、なぜ、その時父がおこる(ハ)か、なぜ自分をせめるかのを(ハ)だんだんわかってきた。自分は自分の(=)ことしか考えてない、自分はいつも正しいと思っている(ハ)。子供だったのに、大人の様なまねをするから(ハ)、理屈もわかって

なくせに(ハ)、正しい(イ)と思っておこられるのが当然だと今わかっていた(ハ)。ただ、あまり子供の理由、意見を聞いてくれない父だから(子供だったから聞いても意味がないと思っただかもしれない)その点だけは父の欠点だと思(ハ)。でも、自分(ニ)は大人になってから、自分(ニ)の話、自分の意見を聞いてくれて、良いか悪いかの(ハ)を一言で断言しないで、父の意見、父の体験を聞かせてもら(ハ)。「お前も一人前の大人なんだから、自分の意志、自分の力を信じて、すべてのことを自分で判断すべきだ」といつも父が言っていた。そのときの父の姿を見て感心した(ハ)。自分も、もし子供がいたら、父のような父になれるか(ハ)(ニ)どうかは心配だ(ニ)。自分は父の立場だったら、どう言う姿勢をとるべきか、子供から見て、自分のことをどう思うかは今でも(ニ)わからないまま……(ロ)解けない問題でした(ニ)。

注. (イ)(ロ)(ハ)(ニ)は各々表記、句読法、文法、用語の誤りを示す。

### 訂正版「人生の師」

ワット

だれもが、天才として生まれてくるわけでもないし、たとえ天才でも素晴らしい物を発見する場合でも、おそらく、先人の書いた本を読まなければ、簡単にはできないと思う。普通の人間は身近な人から学びとる場合が多い。生まれてはじめて知る仲間と言ったら、まず親や兄弟である。これらの人間は私の人生、私の将来に多かれ少なかれ、影響をおよぼすだろう。

ちなみに、私の親の例を取って話そう。父は体が大きい。いや、小さい頃に父を見てそうであったが、最近になって、そう言う感じがだんだんなくなった。父は太っていたから余計に大きく見えたのかもしれない。子供の立場から見て、父は強く、力もだれにも負けないと私は感じていた。そのころの父は、やさしいときもあるが、むしろ厳しさを前に出すタイプだった。子供はだれでも、厳しい父、こわい父よりもやさしい父が好きだろうが、年がたつにつれて、なぜその時父がおこったか、なぜ私をせめたのかがだんだんわかってきた。子供は自分のことしか考えない、自分はいつも正しいと思っている。子供だったのに、大人の様なまねをするから、おこられるのが当然だと今になってわかってきた。ただ、あまり子供のそうする理由、意見を聞いてくれない父だったから、(子供だったから聞いても意味がないと思っただかもしれない)その点だけは欠点だと思う。

でも、私が大人になってから、話や意見を聞いてくれた上で、良いか悪いかを一言で断言しないで、父の意見、父の体験を聞かせてくれる。「お前も一人前の大人なんだから、自分の意志、自分の力を信じて、すべてのことを自分で判断すべきだ。」と父は言う。そのような父の姿に私は感心する。

私も、将来子供をもつ時、父のような父親になれるかどうかは自信がない。私が父の立場だったら、どう言う姿勢をとるか、子供から見て、どう思われるかはいまだにわからないままであり、当分解けない問題である。

参考文献

(雑誌)

- 1 木村宗男「上級教材とその扱い方」講座日本語教育(早大)第3分冊
- 2 北條淳子「作文指導の実際」同上第5分冊
- 3 木村宗男「進んだ段階における理解と表現」同上第12分冊
- 4 佐藤洋子「上級段階の作文指導」同上第17分冊
- 5 佐藤洋子「誤用例からみた表現指導の問題」同上第18分冊
- 6 遠藤織江「中級レベルの作文指導」同上第18分冊
- 7 木村宗男「留学生に対する日本語教育の最終目標について」日本語教育(学会) 22号

- 8 特集「表現の指導——書くことを主として」同上43号  
(単行本)

〈日本語教育〉

- 9 教師用日本語教育ハンドブック ①「文章表現」国際交流基金 1974
- 10 木村宗男「日本語教授法」凡人社 1982

〈文章法一般〉

- 11 「現代作文講座」全8巻(別巻付)明治書院 1976
- 12 森岡健二「文章構成法」至文堂 1963
- 13 永野 賢「悪文の自己診断と治療の実際」至文堂 1969

〈教科書、練習帳〉

- 14 長谷川泉他「新編国語表現ハンドブック」明治書院 1982
- 15 「国語表現」(高校国語科教科書)明治書院 1983 その他同趣のものが数社から出ている。
- 17 森岡健二「文章構成法」上智大学外事部 1974 (大学教養課程「国語表現法」用に編集されている。)
- 18 大熊五郎「楽しく学ぶ国語表現」桐原書店 1983
- 19 藤原与一「作文の基礎演習」——短作文の徹底演習——中央図書出版 1977  
(この二冊は、高校生用練習帳)

〈その他〉

- 20 S. N. Williams, The Logic of the English Paragraph 研究社 1969
- 21 Robert Barras, Scientists Must Write-A guide to better writing for scientists, engineers and students Chapman & Hall 1978 (「科学者のための文章読本」富岡, 伊沢訳 南江堂 1983)
- 22 Robert Barras, Students Must Write-A guide to better writing in course work and examinations METHUEN 1982
- 23 W. M. Rivers, Teaching Foreign-Language Skills The University of Chicago Press 1968 (「外国語習得のスキルとその教え方」天満美智子訳 研究社 1972)
- 24 木下是雄「理科系の作文技術」中公新書 1982